

シンポジウム「共生の人文学」

- ・主催：神戸大学大学院人文学研究科若手教員プロジェクト
- ・共催：神戸大学大学院人文学研究科倫理創成プロジェクト
- ・日程：2008年12月21日（日）13：00から18：00まで
- ・場所：神戸大学大学院人文学研究科A棟1階学生ホール
- ・講演者：

第一部：基調講演（司会：羽地 亮）13：00から14：00まで

川本隆史（東京大学大学院教育学研究科教授）

「「共生」の系譜学のために——生後8ヵ月健診の臨床レポート」

*小著『共生から』（双書・哲学塾、岩波書店）が世に出て8ヶ月が経とうとしている。幸いなことに、書評も含めていくつかの反響があった。その一部に応え、書物のaftercare およびafterthoughtを提供すべく、「共生」という日本語の系譜をたどってみたい。現時点では以下の三部構成を考えている。

- 1 大正デモクラシーと「共生」——有島武郎の「共生農園」と白鳥省吾『共生の旗』
- 2 シベリアとヒロシマ——石原吉郎の「告発せず」に対する栗原貞子の懸歌
- 3 養護学校義務化阻止闘争と「共生・共育」論——「教育の現代史」の欠落を埋める

第二部：学術推進研究員による報告（司会：平井晶子）14：00から16：00まで

井上英昌「J. S. ミルの寛容論——共生の条件を考えるために」

要旨：系譜的に「寛容toleration」に関する問題は、宗教・法・社会的態度・個人的な徳などの問題として扱われてきており、多岐に及んでいる。近年では自由かつ多元的な社会を考える場合に、その問題が政治哲学や自由主義の文脈において顕著に見受けられる。そこで本発表では、19世紀の古典自由主義者であるJ. S. ミルの寛容論に焦点をあて、その議論を検討し、ミルにおける寛容の射程とその限界を把握することによって、「共生」の条件を考察してみたい。

深見貴成「1920年代日本における恩給と行政——共生を担う存在について」

要旨：1923年（大正12）に制定された恩給法は、それまで軍人・文官等でバラバラになっていた恩給制度を統一する目的があって成立した。恩給とは現在でいうと年金に近い制度だが、問題の焦点として、だれがそれを受給するか、という点が議論になった。その議論、すなわち誰が恩給対象＝行政を担う存在＝「公務員」なのかということについて、当時の雑誌史料等を中心に検討していきたい。最終的には、1920年代における行政を担い、公共性を持ちうる存在の歴史的意義について展望したい

具知瑛「トランスナショナル空間における「共生」の意味——中国青島の国境を越えて流動する人たち」

要旨：様々な背景で中国青島という「場所」へ移住し、不断に本国（あるいは第三国）との関係をもち続けながら生活を営んでいる人々の日常を紹介することによって、「共生」の意味を問い直してみたい。

雑賀忠宏「“「有害」なマンガ”へのまなざし——「娯楽表現」の公共性と多文化共生」要旨：性表現等の“「有害」マンガ”への規制をめぐる、現在も続く規制派／擁護派の動向と議論をとりあげる。そして、それらの検討を通じて、メディアが我々の日常的経験を織り成すようになった今日の社会において、“単なる娯楽のための表現”でさえ（あるいは、だからこそ）抱え込まざるをえない表現の公共性や正当性、倫理性といった問題を、多文化共生の観点からいかに考えるべきなのか、という点へと議論を接続する。

第三部：教員による報告（司会：伊藤隆郎）16：00 から 18：00 まで

樋口大祐（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

「文学テキスト（古典／現代）を読むことと「共生」のあいだ」

小山啓子（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

「近世フランスの社会において「他者」を受容すること——宗教戦争とナント王令をめぐる歴史解釈上の問題点を中心に——」

全体質疑

総括コメント 松田毅（神戸大学大学院人文学研究科副研究科長）

・趣旨：「共生」というテーマについて、人文学の様々な分野の視点から考察を加え、相互の意見交換をはかることによって、人文学の諸分野を横断する規範的視点を明るみに出すとともに人文学の総合的課題を追求する。